



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3876 号 2017.9.4 発行

**社説 障害者雇用事業所の閉鎖 よい職場を増やすために** 毎日新聞 2017年9月4日

障害者が働く「就労継続支援A型」というタイプの事業所が閉鎖され、多くの障害者が行き場を失う事態が相次いでいる。

「A型」をめぐる不適切な運営が目立つことから厚生労働省が今春、補助金支給の要件を厳しくした。その影響で、経営が苦しくなっている事業所が多いという。厚労省や自治体は経営実態を把握し、障害者が突然放り出されないことがないよう対策を立てるべきだ。

岡山県と香川県で同じグループが運営する事業所7カ所が7月に一斉に閉鎖され、障害者約280人が解雇された。名古屋市に本社のある株式会社も全国6カ所の事業所を閉鎖した。今後も各地で閉鎖が相次ぐ可能性がある。

2006年施行の障害者自立支援法で就労関連事業は拡充された。

就労継続支援は「A型」と「B型」があり、いずれも国と自治体からの補助金で運営されている。「A型」はさらに障害者1人5万～6万6000円(月)の助成金も支給される。障害者と雇用契約を結び、最低賃金以上を支払うことが義務づけられている。

本来、補助金は指導職員の人件費や事業運営の諸経費に投じられ、障害者の賃金は事業で得た収益から支払うことになっている。ところが、収益の上がる事業ができないため、必要経費や指導職員数を抑え、補助金を障害者の賃金に回してつじつまを合わせている事業所が多い。

岡山の事業所はダイレクトメールの封入やリンゴの包装ネットの生産を障害者の仕事にしていたが、十分な収益が得られなかったという。

初めから障害者の賃金を抑えるために就労時間を短くしたり、収益につながらない軽作業をさせたりしているだけの事業所も少なくない。

多額の補助金を得ながら、「就労」に値しない運営実態の事業所が整理されるのは当然だ。

ただ、失職する障害者の中には突然の環境変化に弱い人もいる。安心して別の就職先に移ることができるよう、国や自治体、地元の福祉事業所は協力して対応すべきだ。

障害者に働きがいや高賃金を保障している「A型」事業所もたくさんある。よい職場を増やすためのステップにしないといけない。

**障害児発想の衣装披露 高知市で9/24にファッションショー**

高知新聞 2017年9月4日

ダウン症などの障害がある子どもとその親のグループが、ファッションショーを高知市で開こうと計画している。子どものデザインや飾り付けを生かして手作りした衣装20着ほどを24日、同市棧橋通4丁目の市立自由民権記念館で披露する。手探りで準備を進める母親たちは「枠にとらわれない豊かな感性を発信したい。ぜひ見てほしい」と呼び掛けている。

発案者は同市曙町1丁目の主婦、田村みわさん(49)。長女の真子さん(19)の絵画

などを見て「色彩感覚がいい」と感じ、3年前から一緒に高知文化服装専門学校（同市上町3丁目）で洋裁を学んでいる。



初のファッションショーに向けて準備を進める田村真子さん＝右から4人目＝ら（高知市曙町1丁目）

県外で障害者らのファッションショーに参加した経験があるみわさんは、今年6月ごろに「子どもの才能を発表する場をつくりたい」と一念発起。知人の保護者らに声を掛け、イベント開催の経験などはないものの、約20人で実行委員会をつくって準備を始めた。

週に数回、田村さん方に集まって準備し、8月に入って衣装作りも本格化。メンバーの一人が「(ダウン症の)次男がお兄ちゃんの

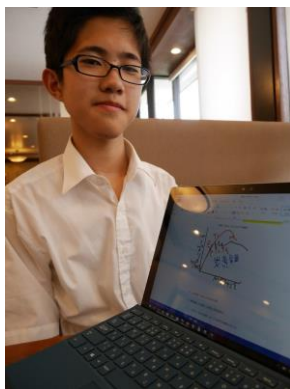
絵の上から絵の具を塗りたくって…」と話せば、「それもアート！」と笑い合いながら、にぎやかに手を動かしている。

衣装は、子どもがリボンや毛糸などで装飾したり、Tシャツにペイントしたり。真子さんは自らデザインした青いドレスも完成させ、「緊張するけど楽しみ」と期待を膨らませている。

昨年7月に相模原市の施設で起きた殺傷事件の加害者が障害者に差別的な主張をしたことについて、田村さんらは「ショックだった」。「育てるのは確かに大変。でも、それだけじゃない。新しい世界をたくさん見せてくれる」とファッションショーに思いを込めている。

イベントは午後1時半～4時40分で要予約。医療心理カウンセラーによる講演やクリスタルボール演奏も予定している。入場料1500円（ペア2千円）。予約・問い合わせは氏名、人数、問い合わせ内容など必要事項をメールで実行委（3mamimi3@gmail.com）へ。

#### 教育の窓 夢への一歩が開けた 入試で障害者への配慮 毎日新聞 2017年9月4日



進学した工業高で授業中に使っている端末を見せる松谷知直さん。端末ではデジタル化されている教科書を読むこともできる＝奈良県玉寺町で

<k y o i k u n o m a d o >

行政に障害者への合理的配慮を義務付けた「障害者差別解消法」の施行後、初めての公立高校入試がこの春、実施された。毎日新聞が行った都道府県教委へのアンケートは、学習障害のように困難さが分かりにくい障害を持つ受験生が不利益を被らないように配慮しながら、他の生徒との公平性をどのように保つのかで頭を悩ませる現場の姿を浮き彫りにした。社会が少しずつ変わる中、配慮を受けて志望校に合格した学生たちは、夢に向かって勉学に励んでいる。【水戸健一】

アンケートは7月に実施し、大阪、鳥取、佐賀、沖縄県を除く43都道府県教委から回答を得た。

#### 【産経抄】死なないで 逃げるは恥かもしれないけれど共感を呼んでいる 9月3日

産経新聞 2017年9月3日

人と人の関係には足し算型と掛け算型がある。先月永眠した気象エッセイストの倉嶋厚さんが自著にそう書き留めていた。妻の泰子さんとは「1×1」の掛け算型夫婦だったという。自立した2人が暮らす「1+1」ではなく一心同体だった、と。▼足し算型なら、

一方が欠けても「1」が残る。掛け算型は〈一人が「0」になるとすべてが「0」になってしまう〉(『やまない雨はない』文芸春秋)。病で妻に先立たれた倉嶋さんはうつ病を患った。自殺の誘惑に何度も負けそうになったと打ち明けている。▼新学期の始まる9月1日前後に自ら命を絶つ子供が多い、との内閣府調査が示されたのは2年前である。この夏も、悲しいニュースに何度も触れた。人間関係やいじめを苦にする子供にとって、死の衝動に突き動かされやすい季節であることは理解できなくもない。▼掛け算型の間柄は、夫婦にかぎるまい。親子も、兄弟姉妹も同じだろう。「×1」の相手が失われることで、世界が「0」になる人は必ずいる。思い悩む子供たちに伝えたい。最後の一線を越える前に、喪失感に嘆き悲しむ人たちの顔を思い浮かべてはくれないか。▼アメリカバクは敵から身を守るとき、一目散に水に飛び込む。人も同じ。逃げなさい。上野動物園の公式ツイッターに載った書き込みが、共感を呼んでいる。「もし逃げ場所がなければ、動物園にいらっしやい」と。似たような思いを誰もが抱えているからだろう。▼〈冬憶(おも)ふまじ今紅くナナカマド〉嶋田摩耶子。闘病中の倉嶋さんを慰めた句だという。先のことを思い煩うな、赤い実をつけた目の前のナナカマドを楽しもう。この先、春秋に富む子供たちではないか。耐えきれないときは遠慮なく逃げなさい。

#### 「農福連携」マルシェにぎわい 京都

京都新聞 2017年9月3日

大勢の人たちでにぎわうノウフクマルシェ(京都市下京区)



全国の福祉事業所で手掛けた農産物や加工品を販売する市場「ノウフクマルシェ」が2日、京都市下京区四条通河原町東入ルの京都マルイ前で始まった。旬の野菜や菓子類などが並び、大勢の買い物客でにぎわった。

障害のある人の農業就労「農福連携」の取り組みを進めようと、全国農福連携推進協議会と府などが共催して初めて開いた。3日までの2日間で、京滋をはじめ福島県や鹿児島県などから約30事業所が出店する。

店頭にはナスやタマネギ、ピーマンといった野菜や、ブドウ、ジャム、クッキー、パンなどがずらり。買い物客が味見したり、事業所の人との会話を楽しんだりして、お目当ての品を買求めた。

4歳と1歳の子どものために減農薬の野菜とパンを購入した池上徹さん(33)＝上京区＝は「(農福連携の)取り組みを初めて知ったが、もっと広がってほしい。購入することで支援になれば」と話した。

3日も午前10時半～午後8時半に開催。無くなり次第、順次終了する。

#### 皇太子ご夫妻国文祭を鑑賞 奈良で、ハンドベル体験も 産経新聞 2017年9月3日

皇太子ご夫妻は3日、国民文化祭などの開会式出席のため訪問中の奈良県で、文化祭の一環で行われたハンドベル演奏や車いすダンスを見学された。午後、近鉄奈良駅を出発し帰京の途に就いた。

ご夫妻は午前、同県王寺町の文化福祉センターを訪れ、同町で盛んなハンドベルの演奏を鑑賞。小学生チームとして出演した大西遥斗君(11)からハンドベルを借り、鳴らし方を教わりながら、1回ずつ鳴らして笑顔を見せた。

午後には奈良市の県文化会館で、障害のある人とない人が共に踊る車いすダンスの練習会を見学。車いすに乗って華麗な演技を披露した会社員林佐恵さん(44)は、雅子さま

に「ターンでくるくる回って目が回らないですか」と尋ねられ「最初は目が回って転ぶこともあったけど今は大丈夫です」と応じたという。

国民文化祭は今年初めて、全国障害者芸術・文化祭と一体で開催。ご夫妻は2日午後、奈良県入りし、奈良市の東大寺大仏殿で行われた開会式に出席した。

## アートイベント 障害者と健常者と一緒に作品作り 気持ち自由に表現 絵描くの「楽しい」 仙台 /宮城

毎日新聞 2017年9月3日

障害の有無に関わらず自由に表現することを楽しむ「ボーダレスアート」の体験イベントが2日、仙台市若林区荒町の「ワンダーアートスタジオ」で開かれた。スタッフの手や声を頼りに絵筆を走らせた視覚障害のある男性は「目が見えなくなってから絵を描くことなんてなかった。一緒に描くのは楽しい」と笑顔を見せた。

東日本大震災後に心に傷を負った子供や障害者が気持ちを自由に表現できる場所をつくろうと、NPO「ARTS for HOPE」が空きビルを改装してアトリエにし、今年4月から毎月、イベントを開いている。この日は幼児から大人まで35人が参加。午前と午後に分かれて1枚の白紙を囲み、思い思いの色で絵を描いた。

## 10回転職した男が語る「障害者福祉」の深い闇 利用者への虐待、丸2日寝られないシフト… 大川 えみる：保育ライター

東洋経済 2017年09月04日

知的障害者福祉施設の事務員、食品工場のパート、ホテルのフロント係、精神・身体的障害者福祉施設の支援員、老人ホームの相談員――。

2017年夏、関西在住の男性、Aさん（46歳）と喫茶店で面会した際に見せてもらった履歴書の職歴欄は、1ページに収まりきれないほどのボリュームだった。これまで転々としてきた職場の数を数えてみると、障害者福祉施設を中心に、11カ所にも及ぶ。



障害者福祉施設に転職するたび、問題のある現場にほうり込まれてしまったAさん。これはたまたまなのでしょうか（写真：amadank / PIXTA）

### 「転職10回」に見た社会福祉施設の過酷な現状

日頃は保育のブラック化など保育園の問題を取材している筆者だが、今回、Aさんの“転職人生”の話を伺ううちに、障害者福祉施設などの社会福祉業界全体に、保育園とも共通する職場環境の不備があることを改めて強く認識した。そこで、今回はAさんが転職の度に直面してきた福祉業界の過酷な現状を、レポートしてみたい。

### 取材に応じるAさん（筆者撮影）

Aさんは、とある有名大学への在学中、双極性障害（いわゆる躁うつ病）を発症した。新卒で4年間営業の仕事に就いたあとにも、半年ほど病気の治療施設に通った。

症状が落ち着いたAさんは、2004年から工場に就職したが、次第に自らがお世話になった障害者福祉施設での仕事に関心を持つようになる。そして、2005年からは自ら利用していた施設（I社とする）のパート事務職員となった。

この施設で働いている期間、Aさんは、障害者福祉のために精力的に動き始める。障害者に関する全国大会の運営ボランティア、NPO団体の設立など、次々と活動の幅を広げていった。振り返って考えると、Aさんが理不尽な思いをせずに働くことができたのは、ここにいた間だけだ。



2009年、生まれ故郷に帰ってきたAさんは、とある社会福祉法人の障害者福祉施設（K社とする）で、常勤の支援員として働き始める。が、働き始めてそう経たないうちに、同施設の異常な実態を目の当たりにすることに。

施設では、職員が利用者に対して大声で怒鳴る、命令する、たたく、といった虐待行為が横行していたのだ。仰天したAさんは、職場の同士たちとともに経営者に意見し、同施設を管轄する自治体にも訴えた。

Aさんら職員からの通報後、行政はすぐさまK社へ聞き取り調査に入ったものの、不思議と簡単な指導にとどまり、虐待をした職員らが処分されることもなかった。ただ、Aさんが自治体に通報したことは経営陣に筒抜けになっており、親身になって話を聞いてくれていた自治体の担当部署の職員たちは、年度末のタイミングでメンバーが総入れ替えになった。「上から、何らかの圧力があつたとしか思えない」とAさんは唇をかむ。そして、施設内での犯人捜しが厳しくなった2012年、AさんはK社を去った。

### **超過酷！月曜日朝から火曜日の夜までの連続勤務**

次に就職したのは、知的障害者の地域移行（入所施設から地域生活へ移行すること）を進める社会福祉法人（S社とする）。ここでは、利用者の支援業務に従事することになった。ところが、就職時に双極性障害があることを伝えていたにもかかわらず、彼に課された勤務シフトはあまりに過酷だった。毎週月曜日の朝から日勤で働いたうえで、夜勤、そのまま続けて火曜日の夜まで日勤で働いた。火曜の夜には帰宅できたが、水曜から金曜までは休みなく日勤が続く。こうした働き方によって、1カ月の労働時間は250時間を超えることもあった。労働基準法の「1カ月単位の変形労働時間制」を敷いていたとしても、70時間以上の超過勤務になる。超過した分の手当など出ない。こうして、ここで働く職員の多くは半年から1年で退職していくのが通例となっていた。

Aさんは、この勤務体制に1年間耐え続けたが、やがて日曜日の夜になると心臓がバクバクし、息苦しくなるといった症状が出るように。双極性障害がさらに悪化していったのだ。そこで、上司に「夜勤を減らしてほしい」と相談したところ、会社からの回答は「あなたにしてもらう仕事はもうないです」というものだった。退職が頭をよぎったが、住宅ローンの返済があるために、今辞めるわけにはいかなかった。

そこで働き続けることを伝えたところ、正社員からパートに格下げになった。パート勤務となったAさんは、やりたかった支援業務からも外され、午前中は厨房に配置、午後は16時まで事務職という変則的な勤務を命じられることになった。「障害者支援の施設にもかかわらず、障害がある自分へのこの仕打ちはあまりにひどい」——。そう思ったAさんは、最終的に退職を決断することになった。

S社在職中、過酷な日々の中でもAさんは社会福祉士の資格を取得していた。そこで、2014年からは資格が活かせる有料老人ホーム（T社とする）の相談員として働き始めた。

が、こどもAさんの安住の地ではなかった。「高齢者支援は未経験」と伝えてにもかかわらず、何の研修も指導もなく現場に放り込まれ、1カ月経つと「君は相談員として雇えない」と突然告げられた。

そこで再び転職活動を始めることになり、念願の相談員の職にありついたが、転職の回数が多いことを上司にたびたびなじられ、人事担当者に相談した結果、なぜかAさんのほうが退職届を出すことを求められた。

こうしてT社を去ることになったAさんは、2016年にある障害者施設（N社）に雇われた。ここで、Aさんはこれまで経験してきたのとは比べものにならない、地獄のような日々を送ることになる。

ある日、利用者の1人がてんかんの発作を起こして頭を打ち、流血の騒ぎとなった。すると、それを見た理事長は、駆け寄るどころか、面白がってスマホで写真を撮り、ほかの利用者にそれを転送したのだ。あまりのことにあぜんとしたAさんだが、理事長と一部の職員が日常的に利用者への肉体的・精神的虐待を行い、さらには20～21時まで無給で働かせていることも明らかになった。

耐えきれず、Aさんは自治体に対する内部告発を行った。すると、数カ月後に法人内の別施設への異動が告げられた。その施設へ出勤すると、サービス管理責任者からは「あなたは障害者手帳を持っていますか」と質問されたという。そこでAさんが正直に「持っていますよ」と答えたところ、「この施設では、手帳を持っている人は職員として雇えない」と告げられた。加えて、理事長からも「職員ではなく障害者として利用者になれ」と追い詰められたAさんはまたもや退職を選ぶ。

### 9300万円の補助金返還、施設認定も取り消し

ただ、N社が野放しにされなかったことが不幸中の幸いだった。Aさんの退職と軌を一にして、N社には自治体からの特別監査が入り、補助金の不正請求や虐待の事実が明るみに出た。N社は、障害者向け就労支援のサービスを提供したように見せかけて、複数の自治体に対して巨額の補助金を不正に請求していたのだ。

結局、自治体側は合計およそ9300万円の補助金の返還を求めるとともに、一部財産の差し押さえを強行した。続いて、2016年12月末には障害者施設の認定が取り消された。自治体側は、現在もなお詐欺容疑での刑事告訴を検討している状況だ。

なお、N社の理事長は、2002年にもホームヘルパーなどを養成する学校を運営し、講師の資格を満たさない教員に講座全体の7割近くを担当させていたとして、逮捕された過去を持つ人物である。理事長はこの事件で刑務所に入ったが、出所後にN社の経営者になった。なぜN社は認可されたのか。筆者が自治体に問い合わせたところ、「(理事長の逮捕歴は)施設の認可をするうえで判断基準となる、『障害者総合支援法』の欠格事項に該当するものではなかった」という回答があった。

その後もAさんはさまざまな職を転々としたが、2017年に知人のついでで障害者の就労継続支援をする株式会社(H社)に一般職員として入社した。

ところが、Aさんに突きつけられた労働条件は「年間休日79日」という厳しいものだった。労働基準法に規定された1年間の労働時間の限度は2085時間である。一日8時間よりも短い拘束時間で働く条件であれば、年間休日79日でも違法ではない。しかし、Aさんは毎週、法定勤務時間以上の残業を課された。しかも、その分の手当はない。

この条件で待遇も悪ければ、当然人は集まらない。実際、提供するサービスの管理責任者が雇用できず、責任者としての条件を満たしていない社長の妻が、経歴を詐称して就いていた。また、働いているうちに補助金の不正受給なども明らかになった。

Aさんはまたも自治体に内部告発を行ったうえで、未払いの時間外手当を請求して退職。現在も、転職活動を続けており、社会福祉施設も選択肢の中にあるという。

ここまで、証言に基づいてAさんが働いてきた障害者福祉施設の様子をお伝えしてきた。中には、「転職先がたまたま悪質な施設ばかりだったのではないか」「一方的な見解だ」「すぐに転職してしまうAさんにも問題がある」というご批判もあるだろう。ただ、筆者はAさんの職務遍歴の中に社会福祉業界の闇が凝縮されているように思えてならない。そして、Aさんの置かれた労働環境がことごとく過酷なのは、決して「たまたま」ではないと考えている。

単刀直入に言えば、社会福祉業界全般に、深刻なコンプライアンス上の問題があるのだ。社会福祉のことを第一に考え、まじめに運営する経営者も多く存在するが、いざ不正に手を染めようと思ったら、抜け道はいくらでもある。書類上整っていさえすれば、自治体の監査はスルーできることが珍しくないからだ。Aさんによれば、H社の経営者夫婦も、ことあるごとに「市にはわかんないから」と発言していたという。そして、こうした不正が起こる原因を突き詰めていくと、まともに経営すると事業として儲からない、という点に行き着く。

### 「経営者はめっちゃくちゃでも、現場にはやりがい」

社会福祉業界で働き続けるのはいったいなぜなのだろうか。Aさんはこう語った。

「自分自身が障害のある身なので、同じく障害を持のある人を支援したいという思いがあります。資格を生かせるのもこの業界。経営者がめっちゃくちゃでも、現場はやりがいがある

って、職員たちの善意にも救われてきました。……加えて、病気があって年齢を重ねてからの転職となると、医療か福祉関係の仕事しかない、という現実もあります」

現在、社会福祉の現場はどこも深刻な人手不足に悩まされている。その原因の1つとして、職員の高い離職率がある。少し古いデータだが、福祉分野の離職率は16.3%で、全産業平均(14.4%)よりも高く、さらに離職者の勤続期間を見ると、6カ月未満が21.1%で、10年以上勤務しての離職はわずか9.3%である(厚生労働省「福祉分野の雇用動向について」2013年)。

職員のやむにやまれぬ事情や善意のうえにあぐらをかき、使い捨てるような社会福祉施設が跋扈(ばっこ)し続けるかぎり、この人手不足が根本的に解決される日は遠いだろう。

### 障害者選手 はつらつ わかふじスポーツ大会開幕 中日新聞 2017年9月4日 静岡 ◆リオ・パラ五輪出場の佐藤、山口両選手も参加

県内最大の障害者スポーツ大会「わかふじスポーツ大会」(県、県障害者スポーツ協会など主催)の総合開会式が三日、静岡市駿河区栗原の県草薙総合運動場陸上競技場であった。リオデジャネイロ・パラリンピックに出場し、県障害者スポーツ応援隊メンバーの佐藤友祈選手(27)と山口光男選手(28)もゲスト参加。世界で戦うトップアスリートの走りやジャンプを披露した。

開会式では、身体立ち幅跳びなどに出場する丸山悠佑選手(19)=牧之原市=と、知的立ち幅跳びなどに出る杉山恵莉選手(17)=浜松市=が「正々堂々と競技することを誓います」と宣誓した。



1500メートルに出場した佐藤友祈選手(手前)=静岡市駿河区の県草薙総合運動場陸上競技場で

走り幅跳びに出場した山口光男選手=静岡市駿河区の県草薙総合運動場陸上競技場で



この日は、トラックや跳躍、投てきの陸上競技十六種目を実施。スタンドからの声援を受けて、選手は力を出し切っていた。佐藤、山口選手の圧倒的な記録に歓声が上がった。

七月にロンドンであったパラ陸上の世界選手権走り幅跳び(知的障害T20)で八位入賞した山口選手は取材に、「リオでは観客の多さにのまれてしまったが、世界選手権では良い緊張感の中で挑めた」と振り返った。自己ベストは6メートル77で、跳躍準備の安定が課題という。「東京パラでは7メートル跳んで入賞を目指したい。身体障害や車いすに注目が集まっているので、(自分の活躍で)知的障害者のスポーツが盛り上がるれば」と力を込めた。

大会は八月二十七日に始まり、十月八日まで県内各地で十七競技が行われ、選手約三千二百人が出場する。来年秋に福井県内である全国障害者スポーツ大会の選考会も兼ねる。(飯田樹与)

### びわこ競艇場で湖上スポーツ体験 親子連れでにぎわう 中日新聞 2017年9月4日

湖上スポーツの楽しさを紹介するイベント「海と日本プロジェクト BIWAKOフェス」(中日新聞社など後援)が二、三日、大津市茶が崎のびわこ競艇場であった。障害者スポーツへの理解を深める催しもあり、両日ともに親子連れでにぎわった。

ボート選手が陸上トレーニングに用いる機械「エルゴ」を体験できるコーナーは、順番を待つ子どもがずらり。「疲れた」「よいしょ」と言いながらパドルに見立てたハンドルを

引っ張り、指定された百～二百メートル分の距離をこぐのにかかる時間を計った。



エルゴ体験でタイムを計る子ども（右）＝大津市茶が崎のびわこ競艇場で

リオパラリンピックでボート競技の日本代表候補だった谷口佑樹さんのトークショーや、ゆるキャラが〇×形式でパラリンピックにまつわる問題を出題するクイズもあった。イベントは、障害者らでつくるNPO法人「琵琶湖ローイングCLUB」（大津市）が主催。関連団体でのインターンシップ（就業体験）に参加する大学生が催しの企画を練った。

大阪経済大三年の加藤美遥さん（20）は「こう思った場があることを障害者にもっと広められたら、より満足して生活できる社会になると思う」と話した。（高田みのり）

### VRで認知症患者の不安分かった 川崎医療短大で体験イベント



山陽新聞 2017年9月3日  
VRゴーグルを装着し、認知症患者の不安感を体験する参加者

バーチャルリアリティ（VR＝仮想現実）などデジタル技術を活用し、障害者や高齢者のハンディキャップを体験するイベントが3日、川崎医療短大（倉敷市松島）で開かれた。親子連れら約100人が医療福祉について関心を高めた。

イベントは同短大が主催。NPO法人・ウブドベ（東京）が開発したゲーム「ザ・シックスセンス」を使った。

参加者は、人生に見立てたすごろくを進め、こまに書かれた「事故で車いす生活になった」「パートナーが認知症と診断された」といった指示に従い、車いすに乗った人の介助方法などを体験する五つのブースを回った。

認知症のブースではVRゴーグルを装着。降りる駅を忘れてしまった認知症患者の視点の映像が映し出され、不安な気持ちや周囲の支援によって安堵（あんど）する様子を体感した。

家族で訪れた総社市立山手小4年女児（9）は「障害や病気のある人の気持ちが少し分かった。周りにいたら積極的にサポートしてあげたい」と話した。

同ゲームを利用したイベントは中四国では初開催といい、12月、来年3月にも同短大で行う。

### 麻生氏、差別的表現を撤回 「不適切だった」

産経新聞 2017年9月4日

麻生太郎副総理兼財務相は3日、講演で差別的な言葉を使ったことについて「不適切だった」と撤回した。麻生氏は2日、10月の衆院愛媛3区補選の応援で訪れた愛媛県西条市で「選挙を一生懸命やる人は、お祭りを一生懸命やっている人だ」と述べ、熱心に祭りに参加する人を表現する際に精神障害者に対する差別的な言葉を使った。



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も  
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行